

テサロニケ人への手紙第二3章「悪への対処」

1A 悪人から救われる祈り 1-5

1B 主のことばの広がり 1-3

2B キリストの忍耐 4-5

2A 従わない者への警戒 6-15

1B 使徒たちの模範 6-9

2B 落ち着いた仕事 10-13

3B 兄弟への諭し 14-15

3A 平和のあいさつ 16-18

本文

テサロニケ人への手紙第二3章を開いてください。私たちはついに、テサロニケ人への手紙を今朝読み終えます。3章全体を一節ずつ見てみます。私たちはこれまで、パウロが、主が来られることについて、その教えを伝えていったところを見ました。3章は、祈りや、教会の実際の行いについて指導を与えています。私たちは、いろいろ正しい教え、教理は聞いても、その教えに裏打ちされた、具体的な生活の指針は度外視することはできません。教えはそのまま、私たちの生活に反映されます。神の恵みによって救われますが、その恵みは敬虔な生き方の中に現れます。

そこで3章は、この世に生きている限り存在する問題について、取り組んでいます。「悪いことをする人が必ずいる」ということです。教会外にもいますが、実は教会内にもいます。秩序を重んじることなく、人々におせっかいをかける人々です。これは、弱い人々のことではありません。パウロはすでに第一の手紙で教えていましたが、「5:14 怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をし、すべての人に対して寛容でありなさい。」と教えていました。しかし、この箇所でもそうですが、弱い人たちの世話をしている中で、慈善行為を行っていく中で、怠惰な人が、そうした教会の福祉的な働きを悪用して、自分たちのやり放題なことをしていました。それから、教会外の人たちで、嫌がらせをする人々がいます。しつこく迫害してくる人々がいます。そういった、悪い者の存在がない、ということはありません。

教会というのは、平和と秩序があってこそその教会です。神の国は平和と正義がその大きな特徴です。神がおられるところには、平和と秩序があります。家庭で考えるとよいでしょう、誰かが他の誰かを尊重しなければ、絶えず確執があり、だれもが安心して家に休むことはできません。互いに愛し合い、尊敬しているからこそ、安心することができます。それと同じで、神の家族にも平和があって、初めて霊的に養われ、成長できます。それでパウロは具体的な勧めをしていきます。

1A 悪人から救われる祈り 1-5

1B 主のことばの広がり 1-3

¹最後に兄弟たち、私たちのために祈ってください。主のことばが、あなたがたのところと同じように速やかに広まり、尊ばれるように。

パウロは、自分たちのための祈りの要請をしています。その理由は、主のことばが広がるように、ということです。テサロニケの人たちのところに、福音が速やかに広まり、尊ばれました。同じように、パウロたちは今、コリントにいますが、コリントにおいても、同じように広まるように祈ってほしいとお願いしています。

パウロは、互いのために祈ることも勧めています。自分の書いた手紙の中でほとんどすべての教会に、自分たちのために祈ることを要請しています。それは、福音宣教の働きをしているからです。ロマ書「15:30 兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によってお願いします。私のために、私とともに力を尽くして、神に祈ってください。」エペソ書「6:19-20 また、私のためにも、私が口を開くときに語るべきことばが与えられて、福音の奥義を大胆に知らせることができるように、祈ってください。私はこの福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています。宣べ伝える際、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」そして、コロサイ書、「4:3 同時に、私たちのためにも祈ってください。神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。この奥義のために、私は牢につながれています。」このように、福音の働きや奉仕の働きには祈りが必要です。

私はこれから主のご用のため、旅に出かけますが、ぜひ祈ってください。実りのある旅となりますように、祈ってください。そして来週のゲストスピーカーのために、祈ってください。みことばが開かれて、人々の魂を救う神の力が現れることを祈ってください。

²また、私たちが、ひねくれた悪人どもから救い出されるように祈ってください。すべての人に信仰があるわけではないからです。

「ひねくれた悪人ども」というのが、どこにでもいるものです。福音の働きに執拗に反対したり、中傷する者たちのことです。テサロニケにおける宣教の働きが、まさにそうでした。パウロたちのいのちを狙う者たちがいたので、夜逃げしなければいけませんでした。そしてベレアに行きました。彼らはパウロたちの言うことを熱心に聞き、果たしてその通りかどうか聖書を毎日調べました。すると、「使 17:13 ところが、テサロニケのユダヤ人たちが、ベレアでもパウロによって神のことばが伝えられていることを知り、そこにもやって来て、群衆を扇動して騒ぎを起こした。」とあります。そして、パウロたちのいるコリントでは、パウロたちの福音宣教に対して、「反抗して口汚くののしつた」とあります(使徒 18:6)。このように、誰も心が開いて、みことばを聞き入れるわけではないし、

むしろ、中傷をしたり、迫害する者たちがいます。そういった者たち救い出される祈りが必要です。

福音を語れば、必ず、反対する者たちが出てきます。ある時は手紙をよこしてきます。ある時はメールで送ってきます。また、教会に影響力を持てば、戸にまで押し寄せて来て、騒音を出したり、警察を呼んできたり、いろいろな嫌がらせをします。私たちは、そうしたものから救い出される祈りが必要です。

³しかし、主は真実な方です。あなたがたを強くし、悪い者から守ってください。

ここに大事な祈りがあります。祈る時、救い出してくださいと祈る時に、ただ恐れているから祈っていることがあります。主への信頼のない祈りです。ヤコブは手紙で、「1:6 ただ、少しも疑わずに、信じて求めなさい。」と言いましたね。主が真実な方であり、必ず、悪い者から守ってくださると信じながら、悪者から救い出されることを祈ることが必要です。パウロは、主が来られる時に、私たちが責められることのないようにと祈った時も同じことを話しました。「Iテサ 5:23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてください。」

私たちは、二つの危険から守られる必要があります。一つは、不信仰、あるいは信頼していないということです。主が真実な方で守ってくださるということを忘れて、慌てふためくことです。イエス様がガリラヤ湖で、向こう岸に渡ろうと言われて弟子たちは舟に乗ったのに、嵐が来ると、もう自分たちは死んでしまうと思って、眠っておられたイエス様を起こして、「先生、私たちが死んでも、かまわないのですか。」と叫んでいます(マルコ 4:38)。

このような信頼のなさから守られる必要がありますが、もう一つの危険は慢心です。主は約束されたのだから、祈らなくても、何もしなくても、その通りになるのだということです。これは、主に頼っているのではなく、自分に頼っているのです。エレミヤの時代に、主の宮があるからバビロンから私たちは救い出されると人々は思って、慢心していました。へりくだって、祈り、主がバビロンを用いて、自分たちの罪と不法をさばかれることに気づくべきだったのです。不信仰になっているか、慢心になっているか、これはどちらも主ご自身に信頼していないという罪です。

パウロは、テサロニケの人たちが、激しい迫害の中において、それで主の日はすでに来たというような誤った教えが入って来て、心を乱していました。だから、落ち着いて主を待っていればよいのだということを伝えています。主が、「あなたがたを強く」と言っていますね。今、彼らに必要なのは、恐れることなく、主に愛されていることを知り、それで心が強められることでした。

2B キリストの忍耐 4-5

⁴ 私たちが命じることを、あなたがたは実行していますし、これからも実行してくれると、私たちは主にあって確信しています。⁵ 主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐に向けさせてくださいますように。

ここでも祈りを献げていますが、「神の愛とキリストの忍耐に向けさせてくださいますように」と祈っているのは、次に、怠惰な者たちから避けて、諭しなさいという命令をするからです。次に出てくるのは、教会の外にいる、ひねくれた悪人どもではなく、教会の中にいる、おせっかいばかり焼いている人々に対処するからです。そこには、神の愛と、キリストの忍耐が必要となります。神の愛は聖い愛です。弱い者を助け、支える愛ですが、悪いことをしている者たちをなすがままにするような愛ではありません。人々の間にある平和を乱し、問題がないのに争い事をかきたてるようなことには、戒めなければいけません。けれども、本人が悔い改めて、成長できるように、キリストの忍耐をもって臨みなさい、ということです。そして、そのように愛して、忍耐するのは、主がその人たちに対する心が開かれなくてはいけません。それで、「主があなたがたの心を導いて」と祈っています。

ところで、パウロは、彼らがテサロニケの人たちに命じています。「私たちが命じることを、あなたがたは実行していますし、これからも実行してくれる」と言っています。すでに第一の手紙では、淫らな行いを避けること、情欲に溺れて、兄弟たちを踏みつけたり、欺いたりしないことについて、命じていました。「4:2 私たちが主イエスによって、どのような命令をあなたがたに与えたか、あなたがたは知っています。」と言っています。

彼らは命じられても、それを実行する力を持っていました。それは、彼らは、神のことばを人のことばのように受け止めていなかったからです。「I テサ 2:13 こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」聖霊によって、神のことばをそのまま、神のことばとして受け入れる心を持っていました。ですから、ちょうど福音書に出てくる百人隊長のように、上からの命令に服従するからこそ、そのことばに力があることを知っている兵士たちのように、神のことばをそのとおり命令として聞き入れるので、神のことばがそのまま働いてくれるのです。

神のことばが生きて働かないのは、聖書は学んで調べていても、主イエスところに行かないからです。イエス様が、ユダヤ人の宗教指導者たちに言われました。「ヨハ 5:39-40 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」聖霊に満たされて、主から命じられたことをそのまま聞き従うのです。

2A 従わない者への警戒 6-15

1B 使徒たちの模範 6-9

⁶兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な歩みをして、私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟は、みな避けなさい。

主の御名によって命じています。これは、主イエスご自身のみこころそのものだ、ということです。イエス様の名を使っていようと、怠惰な歩みをしている者は、みこころに反したことを行っているのです。しかも、彼は「兄弟」ということです。同じイエスを信じている仲間です。しかし、仲間だからと言って、怠惰なことをしていることを教会で許してはいけません。

むしろ、兄弟だということで、それを利用して肉を働かせる者たちがいます。イエスの名によって、甘えているのです。これは決していけないことです。パウロは、働くことについて、主人が兄弟であれば、ますますよく仕えなさいと勧めています。「I テモ 6:2 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽んじることなく、むしろ、ますますよく仕えなさい。その良い行いから益を受けるのは信者であり、愛されている人なのですから。あなたはこれらのことを教え、また勧めなさい。」私の友人が話してくれましたが、キリスト教のラジオ番組で不動産の宣伝がありました。キリスト者による経営ということで信頼したのですが、見事に騙されたとのこと。そういった宣伝をする人たちに、「一般では経営がうまくいかないから、キリスト者を客にしている。」ということでした。これは逆でないといけませんね。一般の人々に、全く甘えなく、その誠実さと質の良さを知っていただけからこそ、キリスト者としての証しを立てられるのです。そしてすでにキリスト者の人たちには、兄弟たちへの愛からますます、心を砕いて、よりよいものを提供します。

ここで、「みな避けなさい」と命じていますね。それは、怠惰な歩みをしていて、人々におせっかいばかりを焼いているからです。兄弟だと思って善を行おうとしている人々を、かえって利用してわがままになっているので、その対処法は避けるしかないのです。それは、かわいそうだとか、愛ではないとか言われるのではないかと、キリスト者であれば思ってしまいます。しかし、いや、だからこそ、パウロは、その兄弟を真実に愛するために、むしろ避けなさいと命じているのです。

⁷ どのように私たちを見習うべきか、あなたがた自身が知っているのです。あなたがたの間で、私たちは怠惰に暮らすことはなく、⁸ 人からただでもらったパンを食べることもしませんでした。むしろ、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜昼、勞し苦しみながら働きました。⁹ 私たちに権利がなかったからではなく、あなたがたが私たちを見習うように、身をもって模範を示すためでした。

使徒たちは、キリスト者としての歩みがどうあるべきかについて、模範を示していました。私たちに従いなさいと命じているのではなく、その模範に見倣いなさいと命じています。それは、自分たちが勞苦して働いていた姿です。福音を宣べ伝え、みことばを教えていた時に、パウロは天幕作りを

空いた時間にしていたことでしょう。自分たちで生活の必要を工面していました。

「あなたがたのだれにも負担をかけないように」と言っていますね。彼らは信仰をもったばかりで、しかも苦しみの中にいました。コリント人への第二の手紙を見れば、彼らは迫害のゆえ、相当貧しくなっていました。そうした彼らに負担をかけたくなかったのです。また、人からただでパンを食べることは、主のみこころではないことを示すために模範を示すためにそうしていました。主イエスは、「受けるより、与えるほうが幸いである」と言われていました(使徒 20:35)。主は、与え、ご自身が貧しくなることによって、多くの人々を富ませました。それに倣っていくのであれば、自分は働いて、人々に与えるという姿勢が必要なのです。盗んではならないという勧めでも、パウロは同じことを話していました。「エペ 4:28 盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい。」

ただ、「私たちに権利がなかったからではなく」とも言っています。権利があるということですが、福音宣教者は、霊的なことに仕えているから物質なことで報酬を得る権利があるということです。コリント第一で、「9:14 同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。」と言っています。主は、弟子たちに福音宣教の旅に出かける時に、「働く者が食べ物を得るのは当然だからです。(マタイ 10:10)」と言われていました。時々、教会では、自分たちのことを差し置いて、牧師とその家族は清貧に生きなければいけないとします。一般の社会では、ブラック企業、いやそれ以下の基準を、同じ兄弟である牧者たちに、「あなたは人に与えるのが当然」とする傾向があります。権利をふりかざして、他の兄弟に負担をかけるのも問題だし、また相手に「牧師は貧しくあるべきである」という価値観を押し付けるのも問題です。ここに欠如しているのは、互いに尊敬することです。愛をもって敬うことです。

2B 落ち着いた仕事 10-13

¹⁰ あなたがたのところにいたとき、働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました。

とても端的な命令ですね、働きたくない者は食べてはいけません。「では、失業している人はどうするのですか？」という質問があると思います。その人は、働きたくないのではなく、働き口がないのです。全然、状況が違います。働きたくないのか、そうでないのかは、その区別ははっきりしています。働き口がない人も、働くことができます。それは、求職するというだけで働くことができます。朝起きて、ご飯を耐えて、身支度をしたら、ハローワークなどに行って働き口を探すのです。働き口を探すことによって、その人は立派に働いています。そういうことをしていないのであれば、働きたくないのです。働き口がないのではなく、働きたくない、怠惰なのです。

¹¹ ところが、あなたがたの中には、怠惰な歩みをしている人たち、何も仕事をせずにおせっかいばかり焼いている人たちがいると聞いています。

怠惰な歩みをしている人たちがいました。「おせっかいばかり焼いている」というのは、人が頼んでもないのに、関わって来ることを意味します。時間を持って余しているのに、考える必要なことを考えます。休みなく働いて忙しいのは良くないことですが、しかし、仕事があつてそれに取り組むことは、とても健全です。働くことは、神の賜物です。神の与えられた力と知恵を用いていくことによって、自分の思いに、不必要なことを思わなくてすむようになります。

ところで、テサロニケの人たちは、主が再び来られることを熱心に待っていましたが、それで仕事などする必要がないと歪曲して考えたのかもしれませんが、ここで、おせっかいを焼いてばかりいる人たちは、言っていることは立派だったのでしょう。霊的なこと、知識に富んだことを話せるかもしれませんが、けれども、全く逆の生活をしていることも十分にあるのです。

¹² そのような人たちに、主イエス・キリストによって命じ、勧めます。落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。

「落ち着いて仕事」をするとは、どういうことでしょうか。語っていることは大きなことを言っていて、全然、その実が伴っていないということではなく、分に応じて、慎み深く考えていくということです。自分はあるをやったり、これをやったり、落ち着きをなくすのではなく、しっかりと主に任されていることを、どんな小さなことでも忠実に行っていくことです。仕事も与えられたものを感謝して受け止めて、しっかりと取り組んでいくことです。そして、しっかりと取り組んでいく姿勢そのものが、キリスト者としての証しを周囲の人たちに立てているのです。

そして、「自分で得たパンを食べなさい」と言っています。五旬節に聖霊が弟子たちに下って、それで教会が始まりましたが、彼らは自分の財産を主張せず、すべて売り払って、共有して生活を始めました。そして、主が間もなく戻って来られると信じて生きていました。これは、愛の実践に表れで、素晴らしいことかもしれませんが、キリスト者は地に足の付いた生活を見捨てるものではありません。エルサレムやユダヤ地方にいる兄弟たちは、貧しかったことが聖書に書かれています。迫害もありましたが、共産体制がうまく機能しなかったという可能性があります。

聖書は必ずしも、共産制を支持していません。箴言には、労苦して働くことを何度となく教えています。パウロがここで言うように、働いたものが、その実を味わうことができるという原則は、至る所にあります。

¹³ 兄弟たち、あなたがたは、たゆまず良い働きをなさい。

教会の中に、互いに助ける制度がありました。その助ける制度があつたので、悪用して怠惰になっている者たちがいました。そういった悪用があると、裏切られた気持ちになって、もう善を行いた

くないと思ってしまいます。利用されるとそう思ってしまいますね。けれども、失望することなく、善を行ってれば、必ず刈り取る時が来ます。「ガラ 6:9 失望せずに善を行いましょう。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることになります。」

3B 兄弟への諭し 14-15

¹⁴ もし、この手紙に書いた私たちのことばに従わない者がいれば、そのような人には注意を払い、交際しないようにしなさい。その人が恥じ入るようになるためです。¹⁵ しかし、敵とは見なさないで、兄弟として諭しなさい。

ここまではっきりと、パウロは命じています。注意を払って、交際しないようにしなさいということです。これは、決して、しかとするとか、排除するとかということではありません。そもそも、その人は、へりくだって、自分を正すことを知らない人です。高ぶって、自分が正しいと言い張る人です。イエス様が、パリサイ人やサドカイ人のパン種に気をつけなさいと言われましたが、それは、心を頑なにしておいて、自分たちを正しいと言い張り、主の言われていることに全く聞く耳を持たない、その姿勢です。そういった者たちに対する厳しい処置です。

注意を払って、交際しないようにするということは、そういった悔い改めない人たちに行わなければいけないことです。その結果、その人が自分の親しんでいた罪に気づくようにさせます。「恥じ入るようになるためです」とあります。気をつけないといけないのは、敵とは見なさないで、兄弟として諭しなさい、とあることです。そういった者たちと交際しないようにすることは、一つに教会が悪いものから守られるということがあります。もう一つは、悪いことをしている者が罪に気づき、悔い改めることができるようにするためです。

このバランスがとても難しいです。罪に対して厳しく対処する必要があり、かつ、それは愛から出ているものでなければいけません。人はどうしてもどちらかになってしまいます。ただ厳しく対処するだけか、あるいは、罪をなすがままにしていることです。愛をもって諭すのです。

3A 平和のあいさつ 16-18

¹⁶ どうか、平和の主ご自身が、どんな時にも、どんな場合にも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。どうか、主があなたがたすべてとともにいてくださいますように。

今、テサロニケ人の教会で起こっていることに、とても適切な祈りを献げています。彼らに今、必要なのは「平和」です。激しい迫害と苦難の中にいます。その中で、主の日が既に来たかのような怪文書のようなものが、流れてきて、心を乱していました。そして、怠惰な者がやらなくていいことをやっています。それで、平和の主が、平和を与えてくださいますようにと祈っています。私たちも必要ですね、いろいろなことで平安を失ってしまいます。しかし、主がともにおられます。そして、主

は平和の神です。

¹⁷ 私パウロが自分の手であいさつを記します。これは、私のどの手紙にもあるしるしです。このように私は書くのです。¹⁸ 私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたすべてとともにありますように。

パウロの名で手紙が彼らのところに来ていたことを思い出してください。偽の手紙です。ですから、パウロは自分の手による署名をして、これが本物であることを明らかにしました。こうすることによって、テサロニケの人たちが心を乱さないでほしいと願っています。

そしていつまでも、恵みの中に留まってほしいと願っています。手紙の終わりはいつも、主イエス・キリストの恵みですね。私たちに、主はこの上もない愛を注いでくださっています。私たちに値しない好意を寄せてくださっています。恵みによって成長しましょう。